

# 山梨県富士河口湖町滝沢遺跡出土の古代製塩土器

平野修・御山亮済

## はじめに

- 1. 滝沢遺跡の概要
- 2. 出土した製塩土器資料

## 3. 出土状況について

- 4. 考察
- おわりに

## はじめに

2008年2月に、山梨県考古学協会が主催する研究集会「塩の考古学—ゆく塩、くる塩、古代の塩とその流通を考える—」が開催され、山梨県や静岡県などをはじめとする東海地方東部から関東地方における、固形塩を運ぶための容器としての製塩土器（以下、便宜的に「製塩土器」と呼称する）の検討がおこなわれた。当会開催時点で、こうした製塩土器が当該地域で確認されていたのは静岡県西部、栃木県、茨城県ぐらいで、静岡県東部から関東地方にかけては製塩土器の出土は極めて希薄な状況であった。

しかしその後、山梨県内では南アルプス市に所在する向第1遺跡で、8世紀前半代のSI01堅穴建物から出土していた非在地土器片が製塩土器であることが判明し、それをきっかけに、海のない内陸地である山梨県でも古代の製塩土器資料が認められるようになってきた。

今回は、平野修（帝京大学文化財研究所）が研究代表を務める、平成24年度科学研究費補助金（基盤研究C）「中部地方内陸地域における古代・中世の堅塩・焼塩の生産と流通に関する研究（課題番号：24520864）」の一環として、平成24年度から製塩土器資料が報告されていない奈良・平安時代遺跡の出土遺物の再調査をおこなってきており、平成26年度も幸いにも山梨県埋蔵文化財センターおよび山梨県立考古博物館のご厚意により、過去に発掘調査が実施された山梨県富士河口湖町に所在する滝沢遺跡第1次、第2次調査分の出土土器の再調査をおこなうことができた。本稿は、本課題の研究協力者である山梨県埋蔵文化財センターの御山亮済氏、富士河口湖町教育委員会の杉本悠樹氏とともに当該調査をおこない、新たに抽出できた製塩土器資料の報告である。なお、資料の実測と観察表の作成は、主として平野がおこなった。（平野）

## 1. 滝沢遺跡の概要

周知の埋蔵文化財包蔵地である滝沢遺跡は、山梨県土の中心を占める甲府盆地の南側外縁に位置する富士河口湖町河口に所在する。同地区は、河口湖北岸から東岸にかけて形成された御坂山地より河口湖に流れ込む6本の

小規模河川が形成する扇状地上に所在し、滝沢遺跡は御坂山地を構成する霜山の西麓、河口湖の北東約1kmの地点にあたり、標高約850～840mの微傾斜地に位置する。古代の河口地区にあたる地域は八代郡に属し、東海道横走駅（現在の御殿場市付近）から分岐して甲斐国府へ通じる古代官道「御坂路（甲斐路）」が通っていた（平成24年8月に、富士河口湖教育委員会が実施した鯉ノ水遺跡の発掘調査で道路遺構を検出している）。『延喜式』「卷28兵部省諸国駅伝馬条」によると、甲斐国には「加吉」「河口」「水市」の3つの駅家（甲斐三駅）が設置されており、河口地区は河口駅の推定地とされている。滝沢遺跡は古代官道に隣接して営まれた集落跡である。

滝沢遺跡の発掘調査は、平成22（2010）年に供用開始となった国道137号河口2期バイパス工事に先立ち第1次調査が平成17（2005）年に実施され、さらに富士吉田市新倉から河口2期バイパスに接続する吉田河口湖バイパスの建設工事に先立ち第2次調査が平成23（2009）年に実施された。

滝沢遺跡の第1次および第2次発掘調査では、総面積6,080m<sup>2</sup>が発掘調査され、平安時代を中心とする生活面が検出している。主な検出遺構は、9世紀前半～10世紀後半の堅穴建物30棟、集石遺構1基、土坑5基、溝状遺構1基、焼土遺構1基などがあり、第2次調査で発見された堅穴建物はおおむね主軸を同じくして配置されている。おそらく古代官道の路線に影響されるものであろう。特筆すべき出土遺物には、大量の墨書・刻書土器をはじめ鉄鎌、刀子などの鉄製品、漁労具の土錘などがある。第2次調査では他地域との交流があったことを示す相模型甕（V区3号住居）やいわゆる信州系と言われる内黒土器（同5号住居）、武藏型甕（同6号住居）といった外来系の土器が出土しているほか、弥生時代後期の中部高地型櫛描文土器や古墳時代初頭の畿内系叩き甕の出土がみられ、古代官道の整備以前から当地域が交通の要衝であったことを示す資料が見つかっている。（御山）

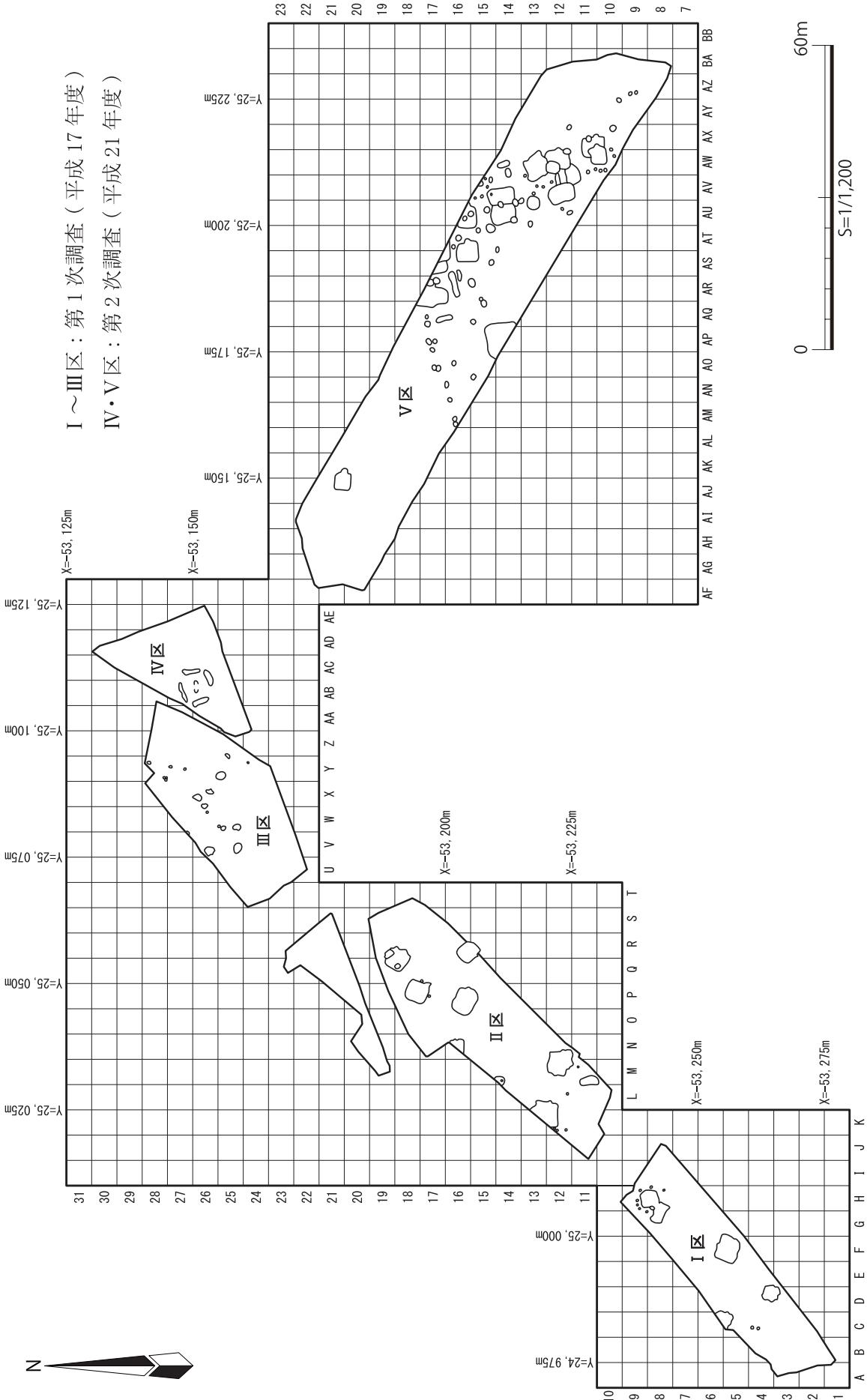
## 2. 滝沢遺跡第1次・第2次調査から出土した製塩土器

滝沢遺跡の既往の調査で出土し、今回新たに抽出した



1. 泡橋遺跡(縄文～近世/散布地) 2. 谷抜遺跡(縄文・平安～近世/散布地) 3. 塚越遺跡(縄文・弥生・近世/集落跡) 4. 炭焼遺跡(古墳・平安～近世/散布地) 5. 井坪遺跡(縄文・平安/散布地) 6. 滝沢遺跡(縄文～平安/集落跡) 7. 追坂遺跡(縄文/散布地) 8. 老坂遺跡(縄文/散布地) 9. 宮の下遺跡(縄文～古墳/散布地) 10. 天女山烽火台(中世/城館跡) 11. 東電放水路遺跡(縄文/散布地) 12. 船津浜中村遺跡(縄文/散布地) 13. 梨宮公園遺跡(縄文/散布地) 14. 鳥浜遺跡(弥生/散布地) 15. 宝司塚遺跡(弥生/散布地) 16. 宮里遺跡(縄文/散布地) 17. 鶴の島遺跡(縄文～古墳/散布地) 18. 大石鐘つき戸(中世/城館跡) 19. 大石遺跡(縄文/散布地) 20. 水木原遺跡(縄文/散布地) 21. 大石の城山(中世/城館跡) 22. 広瀬の城古山(中世/城館跡) 23. 金山遺跡(縄文/散布地) 24. 大築地遺跡(縄文/散布地) 25. 西川遺跡(縄文・奈良・平安/散布地) 26. 宮ノ上遺跡(平安～近世/散布地) 27. 鯉ノ水遺跡(古墳～平安/散布地)

第1図 滝沢遺跡と周辺遺跡分布図



第2図 滝沢遺跡第1次、第2次調査全体図

製塩土器は、「はじめに」でも簡単にふれたが、固体塩を運ぶための容器としての土器であり、鹹水を煮詰め結晶化させる煎熬用の製塩土器ではない。岩本正二氏によれば、製塩土器の用途は土器製塩上二つに大別できるとし、一つは、塩水を煮沸煎熬し塩の結晶を取り出す容器。もう一つは、同一容器あるいは別の容器で作製した塩を焼塩処理し粗塩を精製する容器があるという（岩本 1983）。

海水からの塩づくりとはまったく縁のない内陸地域で出土する製塩土器は、生産用具であり、また運搬・保管用でもある。そして単に土器だけが移動してきたのではなく、土器の中に塩が入った状態で運ばれてきたとみるのが自然であろう。製塩土器の一つの用途である煎熬段階での土器は、長時間火にかけられ、さらに塩の結晶化によって土器自体にかなりのダメージをうけるため、そのまま運搬容器としては使用できないはずである。よって煎熬し粗塩作製専用の壺のような大きな土器と、「焼塩土器」や「堅塩土器」と呼ばれる固体塩にするための小さな土器があったと考えられる。本遺跡の出土資料は後者の土器にあたるが、渡辺誠氏は、近世の「焼塩壺」と古代の「焼塩土器」を比較して、古代の「焼塩土器」は、近世の「焼塩壺」とニガリの成分量などが異なることから、「やきしお（焼塩）」ではなく「かたしお（堅塩）」であり、「焼塩土器」と呼ぶことは適切ではないという指摘をされている（渡辺 1997）。ここでは固体塩づくりおよび運搬のための土器を「焼塩土器」「堅塩土器」とは呼称せず、便宜的に「製塩土器」と呼称する。

滝沢遺跡から今回抽出した総点数は31点で、総重量にして122 gを量る。いずれも5 cm前後の小片ばかりで、口縁部破片が7点で、他はすべて胴部破片で底部破片はない。この傾向は、山梨県内で製塩土器資料を出土している他の遺跡と同じ傾向であり、完形状態で出土する資料は皆無と言って良い。

ただ半完形品ではあるが、県内で唯一底部から口縁部まで残る製塩土器が韮崎市に所在する宮ノ前第5遺跡から出土している（第3図参照）。その詳細は別稿でも報告しているように（平野・閨間 2014）、8世紀前半代の12号住居址のカマド内から出土しており、推定口径10.0cm、底径5.5cm、器高9.0cm、器厚7～8 mmの中厚手で、平底の底部から頸部にかけて外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁端部下約1 cmあたりで「く」の字状にやや弱めに屈曲し、内湾するコップ状の鉢形を呈する。口縁は弱く波状を呈し、その端部は尖形となっている。粘土巻き上げ成形で、指頭調整による凹凸感はあるが、内外面ともに横位・斜位・縦位のナデ調整を施し、底部外面はヘラケズリとナデ調整を施す。なお本資料の底部外面には、浅い刻みの線刻（「×」カ・「×」カ）がみられる。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は砂粒と雲母を含み、白色粒子を多く含み、赤色粒子を少量含むが比較的精選された胎土である。底部外面から口縁部外面の一部にかけて被熱のためススが付着するとともに器面が灰褐色に変色し、内

面も底部から口縁部にかけて一部が灰褐色に変色している。その重量は約110 gを量るが、完形の場合仮に200 g前後とすると、滝沢遺跡全体の出土総重量は、宮ノ前第5遺跡出土資料の一個体にも満たない重量である。

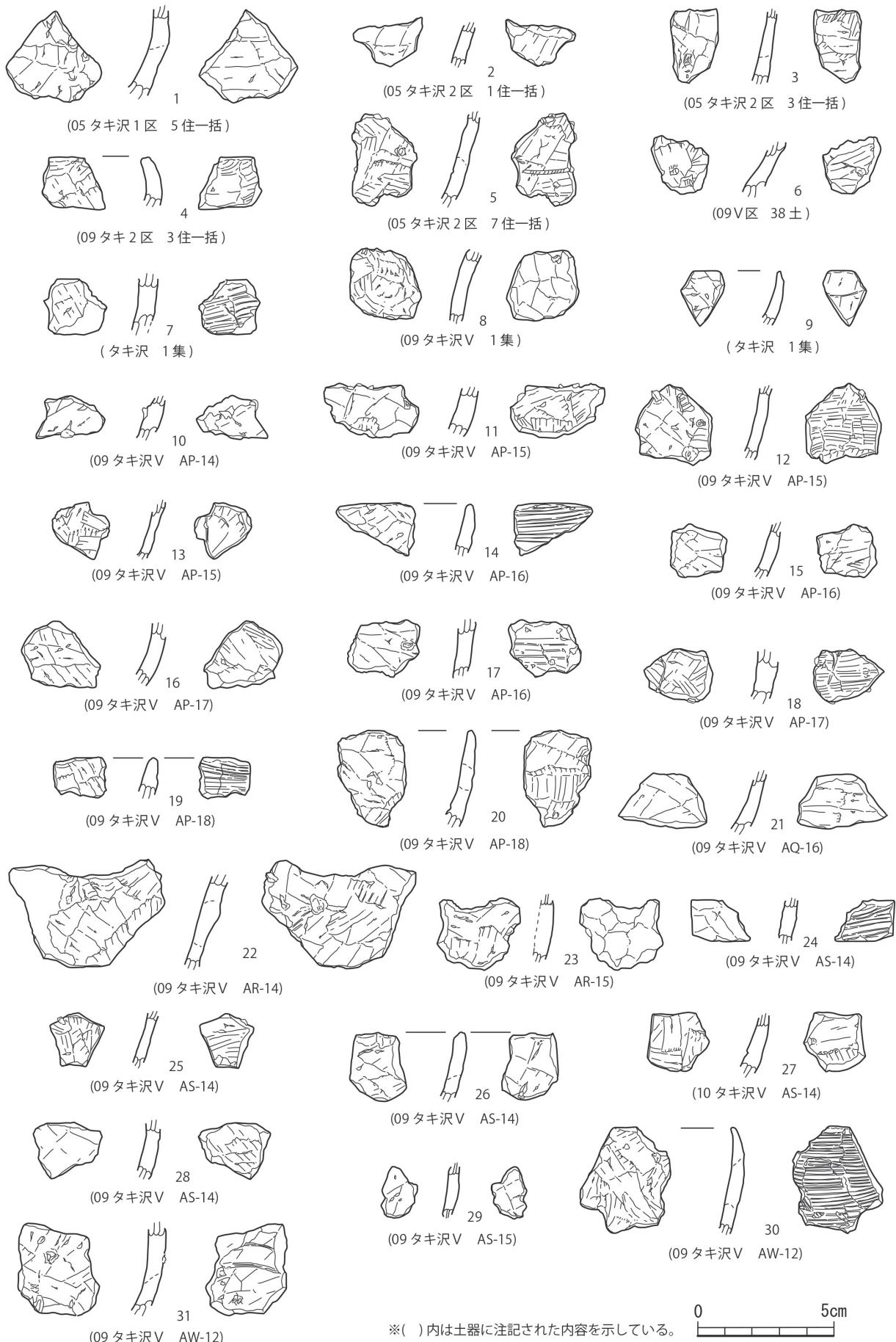
滝沢遺跡出土資料の器厚は、5～9 mmの中厚手のものが中心で、焼成は軟質・硬質のもの半々程度の割合でみられる。基本的に粘土紐積み上げた後に指オサエで整え、回転力は用いていない。内外面共に手持ちの横位・斜位・縦位のナデ調整を施し、内面は外面に比べ丁寧なナデを施している。内面ではナデの他、横位のハケメもしくはハケメ状のナデを施すものがみられる（第4図・写真図版-7・12・14・17・18・19・20・24・30）。本遺跡では総点数に比してハケメを施す資料の出土割合が高くなっているが、他遺跡ではその出土割合が極端に低いため、本遺跡の場合、細片であることから接合関係は認められないが、同一固体の可能性が高い。また、南アルプス市の野牛島・西ノ久保遺跡出土資料で確認できたような内面に布目痕が残る内型を用いた型づくりのものは確認できなかった。

形態は、破片資料のため全体像を捉えることは難しい。山梨県内でこれまでに出土している資料の多くは、コップ形状の筒形ないし鉢形を呈すると推測される。胴部上半部から口縁部の状況から推測すると、内湾気味に立ち上がるものと直線的に立ち上がるものがみられる。筆者が以前に設定した分類基準に照らしてみれば（第5図、平野・閨間 2014）、口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部が尖形を呈するB類（第3図・写真図版-9・20・26）と、口縁が内湾して立ち上がり、口縁端部が尖形のC類-1（第4図・写真図版-30）、口縁端部が面取りされるC類-2（第4図・写真図版-14・19）がみられる。

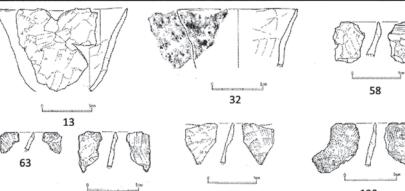
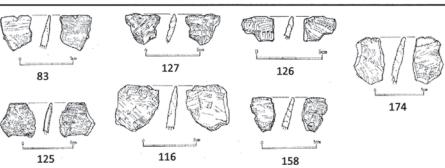
胎土は肉眼観察では、白色・赤色・黒色粒子、雲母、



第3図 宮ノ前第5遺跡出土製塩土器《縮尺任意》



第4図 滝沢遺跡第1次・第2次出土製塙土器実測図

A類	胴部外傾し直線的に立ち上がり、口縁端部下で「く」の字状に屈曲し稜をもつ	
B類	口縁内湾気味に立ち上がる。口縁端部尖形	
C類-1	口縁内湾。口縁尖形	
C類-2	口縁内湾。口縁端面部取り	
D類	口縁外傾ないし外反。外傾面に弱い稜をもち口縁端部尖形(胴部にくびれ)	
E類-1	口縁直立的ないし外傾。口縁端部尖形	
E類-2	口縁直立的ないし外傾。口縁端面部取り	

第5図 荏崎市域製塙土器分類図《縮尺任意》

小礫等を含み、赤色粒子を含むものと含まないものに大別でき、大半は小礫を含み粗製であるが、比較的精選された胎土をもつものも散見できる。色調は黄橙色もしくは橙色を呈し、火熱を受けて外面が赤褐色化もしくは灰褐色化し、器面が荒れるものも散見できる。(平野)

### 3. 出土状況

滝沢遺跡第1次における発掘調査区は、I区、II区、III区、第2次における発掘調査はIV区、V区となっている。製塙土器はそのうちのI区・II区で検出されている堅穴建物覆土内と、V区で検出されている堅穴建物および土坑や性格不明集石遺構、遺構外から出土している。製塙土器資料自体が小片であること遺構覆土内の一括取上のため、各遺構からの詳細な出土位置は不明で、出土遺構に直接伴うものなのかどうかとも疑わしいが、各遺構の年代が判明するものについては便宜的にその年代を各資料に付し、時期不明遺構出土および遺構外出土資料については時期不詳としている。時期判明した遺構の年代は、いずれも9世紀前半代であり、この時期は山梨県内で最も多く製塙土器がみられ

る時期である。

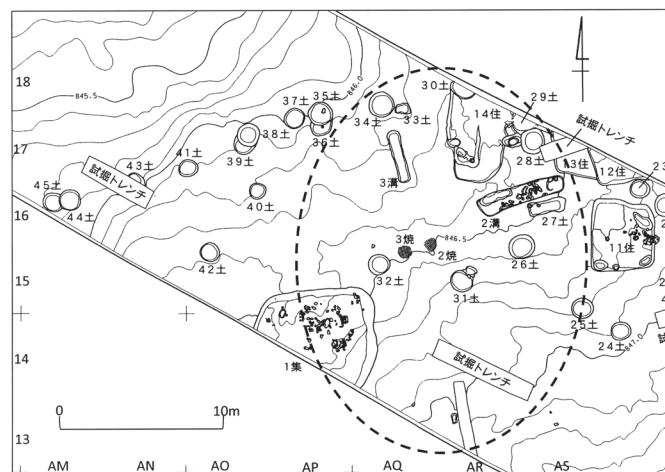
滝沢遺跡第1次・第2次調査では、製塙土器は、堅穴建物や土坑といった遺構内よりも、V区を中心とする遺構外からの出土が目立っており、特にV区中央部のAP~AS-14~18グリッド域内でまとまった分布状況を示している(第6図)。当該グリッド空間には、時期不詳の集石遺構や土坑、溝状遺構、ピット群の他、土師器壺・皿・鉢・甕などが出土する10世紀前半代とされる焼土遺構などが検出されている。当該エリアから出土している製塙土器資料の多くは、強く被熱し赤褐色化や灰褐色化し器面が荒れているものが目立っているのも一つの特徴といえる。(平野)

### 4. 考 察

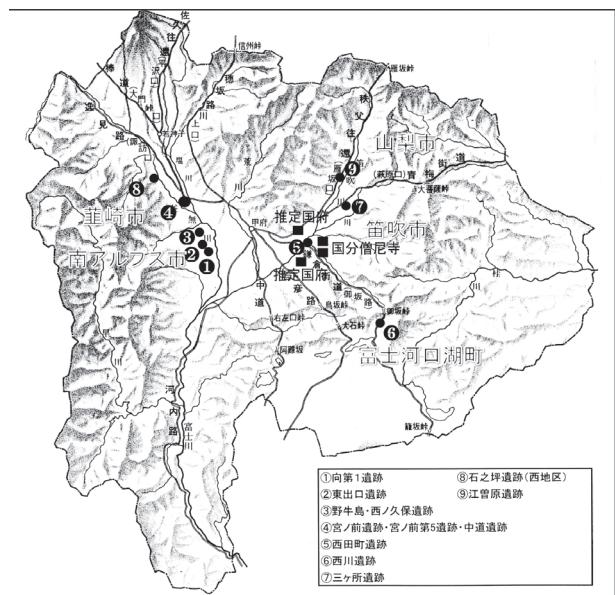
以上、滝沢遺跡第1次・第2次調査における新たに抽出した製塙土器資料の概要を述べてきた。滝沢遺跡周辺では、富士河口湖教育委員会が調査を実施した西川遺跡(杉本2011)と鯉ノ水遺跡(杉本2014)で、少量かつ小片ではあるが製塙土器片が出土しており、特に滝沢遺跡の西方に隣接する2013年度に発掘調査が実施された鯉ノ水遺跡では、滝沢遺跡方面から流下した土石流堆積層の中から9世紀前半代の土師器片とともに製塙土器が出土していたため、滝沢遺跡に製塙土器が存在することは推測されていた。同じく2013年度に発掘調査され、間もなく報告書が刊行される滝沢遺跡第4次調査でも、少量かつ小片ではあるが製塙土器片が出土していると本稿の共著である山梨県埋蔵文化財センターの御山亮済氏からご教示を得ている。

これまでの山梨県内における製塙土器の出土状況は、甲府盆地西部の富士川およびその上流域の釜無川、その支流である塩川流域を中心とする南アルプス市および荏崎市域に製塙土器の分布が濃厚に認められており、甲府盆地東部の笛吹川流域では散在的に確認されている。八ヶ岳南麓地域や甲府盆地中央部、桂川流域の山梨県東部地域ではまだ確認例はない(平野2010・2013、第7図)。

製塙土器の濃密な分布が認められる南アルプス市域の



第6図 滝沢遺跡第2次V区遺物出土範囲図《縮尺任意》



第7図 山梨県内製塩土器出土遺跡分布図  
（『図説 山梨県の歴史』河出書房新社 1990に加筆）

北部に位置する野牛島・西ノ久保遺跡は、奈良・平安時代を中心とする遺構群が検出されている。特にⅢ区、V区、VI区とよばれる地区では、奈良・平安時代の堅穴建物40棟、掘立柱建物3棟、大溝、炭焼窯などが検出され、大溝からは8世紀前半～9世紀前半の須恵器大甕が破碎した状態で多量に出土したり、堅穴建物内からも焼成不良の土師質須恵器がまとまって出土していることから、土器焼成窯は確認されなかったものの、当該期に本遺跡が須恵器生産に関わる遺跡だとみられる。本遺跡で出土した製塩土器資料は、総点数706点、総重量にして2kgを超えており、須恵器生産や炭生産をおこなっていたと考えられることから、本遺跡は巨麻郡内の基幹産業を担う大規模手工業生産拠点の一つであったと推測される。製塩土器は本遺跡では堅穴建物内からの出土が多く、覆土内のみならず竈内からの出土も顕著にみられることから、堅穴建物内での固体塩の焼き直し作業がおこなわれていたことが推測され、仮にそうであれば、固体塩の再加工も含めた塩の集積地であった可能性も高い。

塩川流域で製塩土器がまとめて出土している宮ノ前遺跡および宮ノ前第5遺跡でも、総点数172点、総重量約1kgが出土している。両遺跡は、巨麻郡家の館および各種手工業部門に関連する遺跡とみられており、山梨県内への固体塩の調達に巨麻郡家が深く関与していた可能性が推測される。固体塩は富士川ルートの水上および陸上交通路を介して、下流沿岸地域の生産地から運ばれた可能性が高い。

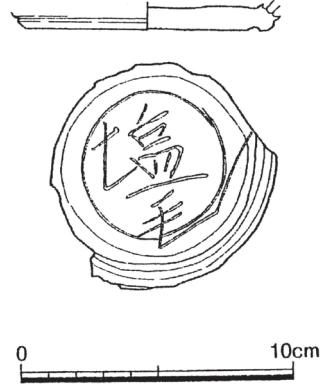
一方で散在的に製塩土器が出土している甲府盆地東部地域の遺跡では、一遺跡における出土量が滝沢遺跡と同様に少ない。山梨市に所在する三ヶ所遺跡の平成22年度の発掘調査では、仏堂風の掘立柱建物跡や9世紀前半代

の堅穴建物跡の覆土内から製塩土器小片が数点出土しているとともに、土師器高台壺の底部外面に「塩毛」と記した刻書土器が出土している（第8図）。刻書きされた「塩毛」の「毛」は、おそらく容器としての「笥」を意味すると考えられ、塩を納めた土器もしくは盛り塩に使用した土器とも推測される。本集落の堅穴建物内で塩を使用した仏教神事などの祭祀がおこなわれていた可能性が高い。

のことから製塩土器に入った固体塩は、一つの用途として仏事や神事などの儀式に用いられたことが想定され、製塩土器自体の出土量が極めて少ないと想定され、その塩は特別な塩だったと推測される。またこうした製塩土器の出土量が少ない遺跡は、主に消費が中心だったと考えられる。その特別な塩は、甲府盆地西部の巨麻郡域の集積地から供給された可能性も考えられる。甲府盆地東部地域に所在する甲斐国府や甲斐国分僧尼寺などの主要官衙や大寺院も塩の流通には深く関与していた可能性も高いが、現段階では甲斐国府や甲斐国分僧尼寺に付随する諸施設や集落遺跡における製塩土器の出土状況が不明なため、今後これらエリアの状況も見極めながら検討していきたい。

こうした甲府盆地内の状況から、滝沢遺跡、西川遺跡、鯉ノ水遺跡など富士北麓地域でみられる製塩土器のあり方をどのように考えたらいいのだろうか。鯉ノ水遺跡では先般、9世紀後半代の土石流に破壊された古代官道である東海道の支路（甲斐路）が検出されており、その発見によって滝沢遺跡の堅穴建物の主軸方向が官道の方向性と一致することなど、集落構造がこの官道に強く影響されている状況が明らかになってきた。この官道は南へ行けば沿岸国である駿河国横走駅へ通じ、さらに相模国や伊豆国へも通ずる。また北へ行けば甲斐国府に通ずるわけだが、滝沢遺跡、西川遺跡などにみられる製塩土器が、東海道本路から籠坂峠を越え人馬によって塩生産地からダイレクトに持ち込まれた可能性と、甲府盆地から御坂峠を越えて持ち込まれた可能性が想定できる。

ところで栃木・茨城両県で出土する製塩土器について分析をおこなった津野仁氏は、内陸部へもたらされた製塩土器は、海浜部の郡司層によって生産・経営された塩が、内陸の郡司層の係わる交易ルートに乗って内陸の集落に広まったとされる興味深い見解を出されている（津



第8図 三ヶ所遺跡第3次3号堅穴出土「塩毛」刻書き土器実測図《縮尺任意》

野 2006・2008、第9図)。同じ内陸の山梨県でも、巨麻郡家の郡司層が固形塩の交易に深く関与した状況がうかがわれる事から、こうした交易ルートにのって山梨県内各地の集落に供給していた可能性も十分に想定できよう。いずれにせよ、今後の発掘調査の進展を待つてさらに検討していきたい。

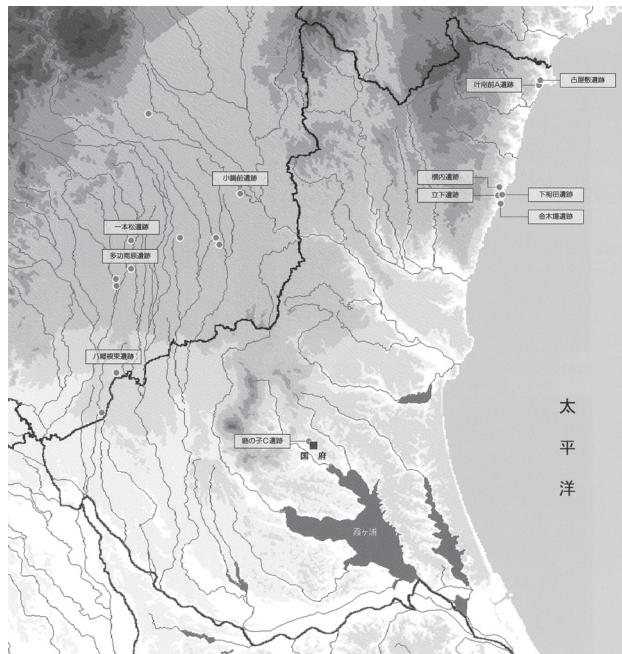
次に滝沢遺跡における遺構外からの出土が目立つ状況については、遺構外からまとめて出土する傾向は垂崎市の宮ノ前遺跡でもみられる(第10図)。宮ノ前遺跡では竪穴建物からの出土が主体的で、野牛島・西ノ久保遺跡のように竪穴内竈からの出土も多く、野牛島・西ノ久保遺跡と同じように固形塩の焼き直し作業がおこなわれていた可能性がある。その一方で、館エリアの掘立柱建物群の空閑地から比較的まとめて出土している。このことは、館という施設の性格上、饗宴などが催される機会が多く、その時に焼き直しを施した特別な塩がふるまわれた際の残滓とみることも可能であろう。滝沢遺跡の場合は、性格不明の焼土遺構などが検出されていることから、推測の域は出ないが、三ヶ所遺跡の事例のように、何らかの神事に伴う儀礼行為に伴って製塩土器に入った塩を使用したのではなかろうか。

製塩土器の一つの消費地であった滝沢遺跡は、山梨県内の平安時代遺跡の中にあって、墨書・刻書土器の出土比率が高い遺跡として注目されている。墨書・刻書土器は、東日本各地の集落遺跡において、土器の所有を文字や記号で表示した可能性もあるが、むしろ村落内の神仏に対する祭祀・儀礼行為などの際に使用された祭具であるとの見方が強い遺物である。墨書・刻書土器が多出する遺跡は、そうした祭祀・儀礼行為が頻繁におこなわれたとみてもよからう。三ヶ所遺跡のように製塩土器の塩が、祭祀・儀礼行為に用いられていることから、製塩土器の存在については、墨書・刻書土器の多寡が一つの目安となろう。山梨県では8世紀末から9世紀前半代に墨書・刻書土器をはじめ仏教関連遺構・遺物も増加し、製塩土器も当該期に集中する傾向がみられる。こうした状況からも、両者が深く関わっている状況がうかがわれる。また墨書・刻書土器が多く出土しているのに、製塩土器の出土量が少ない場合は、消費を目的とした遺跡の特徴であろう。

一方で製塩土器が多量に出土している野牛島・西ノ久保遺跡では、墨書・刻書土器の出土量は極端に少ない。この状況は本遺跡が須恵器などの生産の場であることと、固形塩の供給元としての状況を如実に反映しているものといえよう。今後、富士北麓地域でこうした遺跡が発見されれば、滝沢遺跡の製塩土器はそこからもたらされたと考えることもできる。(平野)

## おわりに

以上、滝沢遺跡第1次・第2次調査出土土器から新たに抽出した製塩土器資料について若干の考察を加えながら



第9図 茨城県・栃木県の製塩土器の主な出土遺跡  
(『霞ヶ浦と太平洋のめぐみー塩づくりー  
茨城県立歴史館特別展図録』2012より)

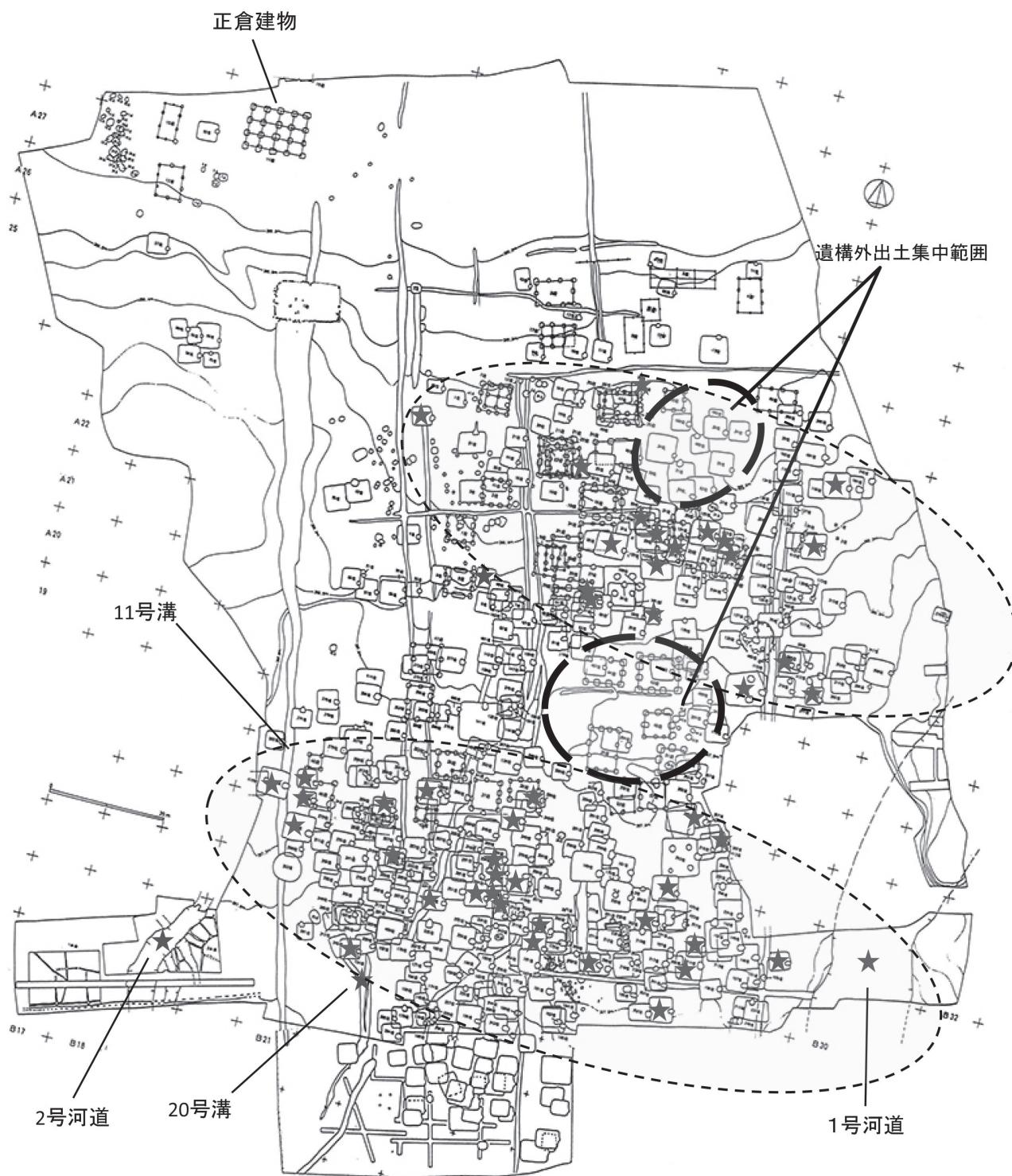
ら報告してきた。製塩土器の沿岸地域からの流通経路や、甲斐国内の流通経路および使用目的など、検討する余地は多々ある。これら研究の進展には、さらなる資料の増加が不可欠である。多くの発掘調査関係者にその存在を認知していただき、今後の資料の増加につなげていけたらと切に願うものである。

最後に、資料の実見から、部外者である平野に本稿を発表する機会を与えていただいた山梨県埋蔵文化財センターおよび山梨県立考古博物館に心から感謝申し上げたい。また、資料調査、資料の実測・トレース、写真撮影、挿図・写真図版作成にあたっては、望月秀和、杉本悠樹、中山響、菅原由美子、須田泰美の各氏に多大なるご協力を賜った。ここに記して感謝申し上げたい。

本稿は、はじめにも触れたように平成24年度科学研究費補助金(基盤研究C)「中部地方内陸地域における古代・中世の堅塩・焼塩の生産と流通に関する研究(課題番号:24520864)」の研究成果の一部である。(平野)

## 参考文献

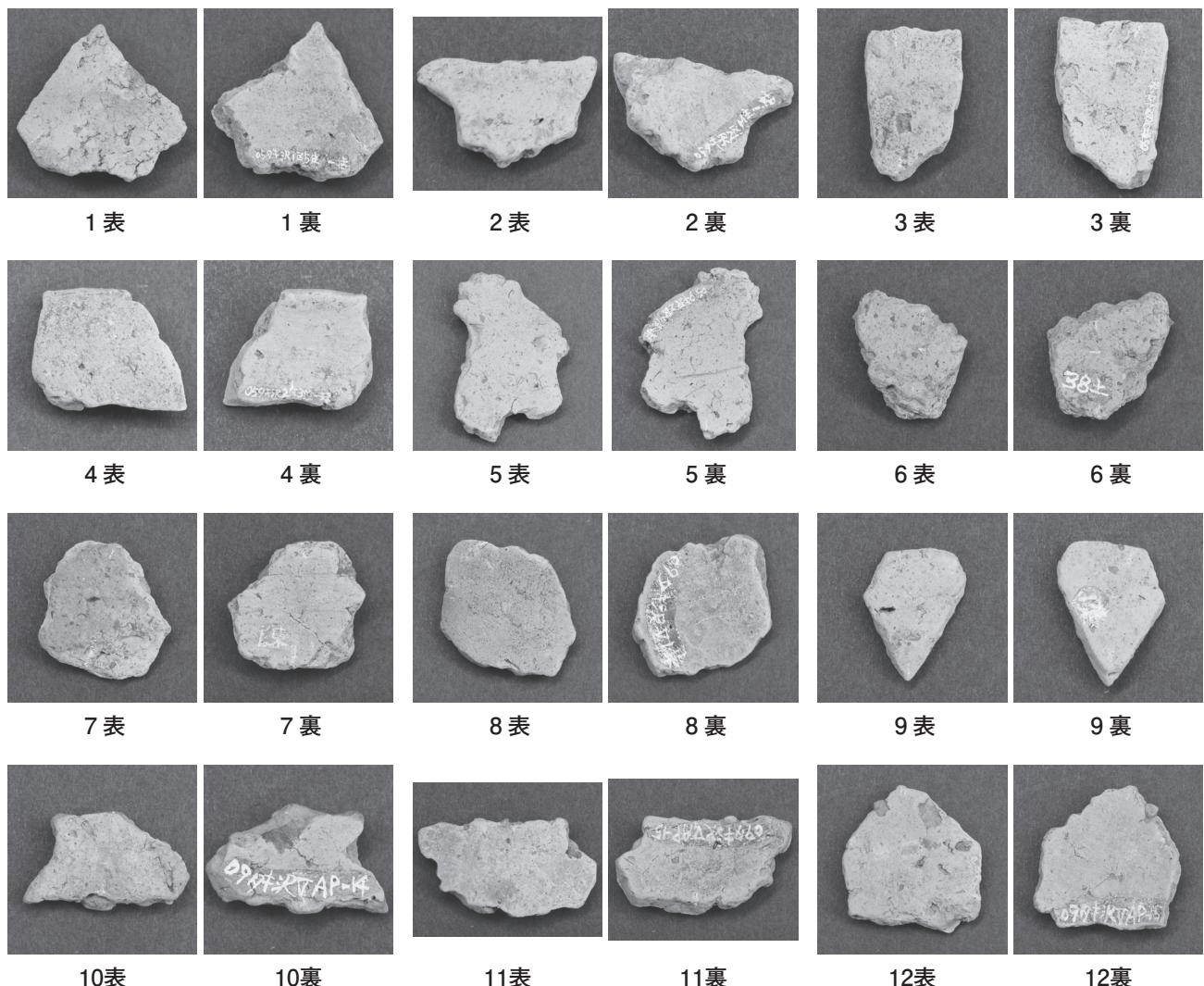
- 茨城県立歴史館 2012 『特別展 霞ヶ浦と太平洋のめぐみー塩づくりー』
- 岩本正二 1983 「7~9世紀の土器製塩」『文化財論叢』、pp.401-418、奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会編、同朋舎出版
- 杉本悠樹 2013 「富士河口湖町西川遺跡出土の古代製塩土器について」『山梨県考古学協会誌』第20号、pp.185-192、山梨県考古学協会
- 杉本悠樹 2014 「鯉ノ水遺跡出土の古代製塩土器」『山

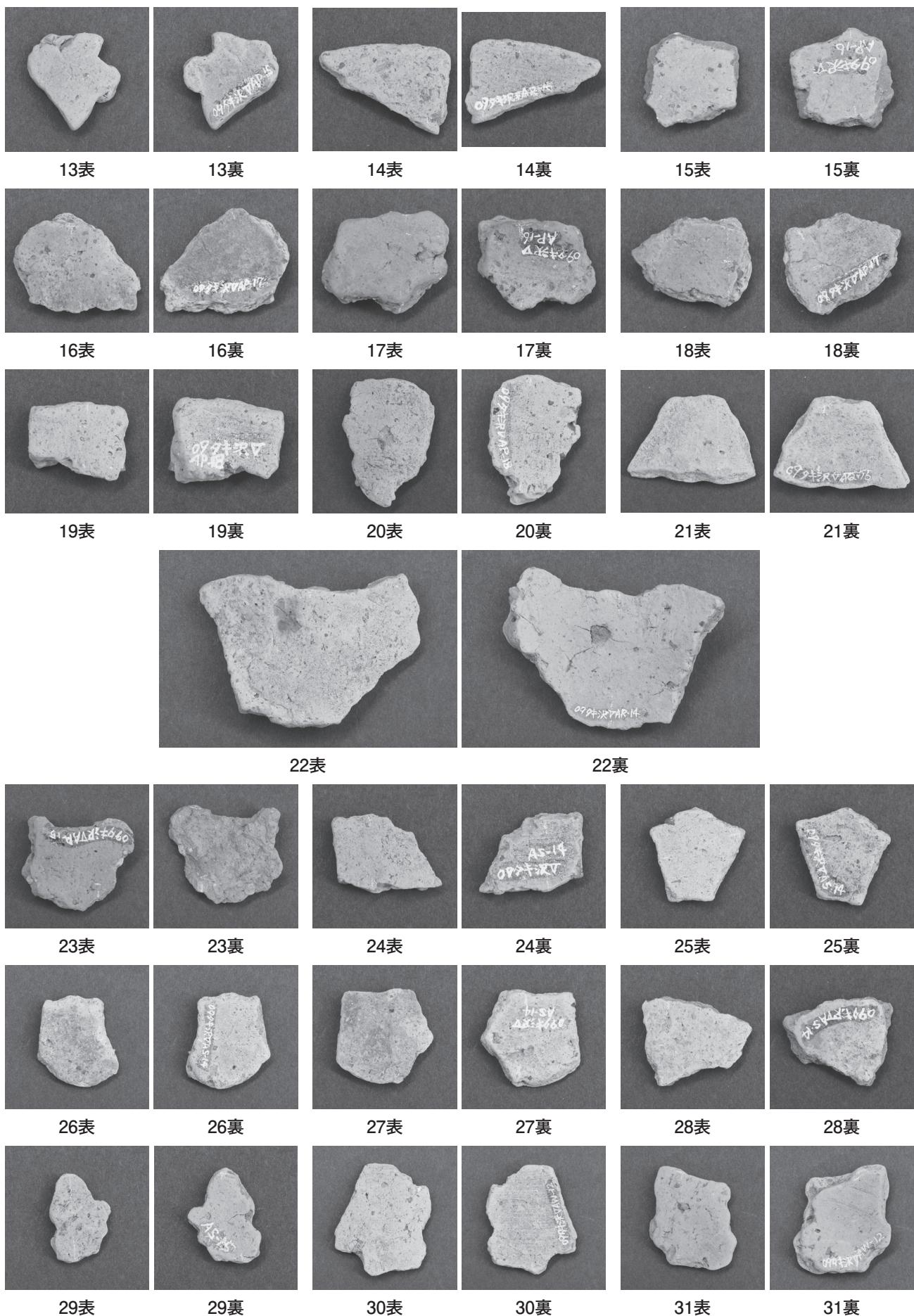


第10図 宮ノ前遺跡製塙土器出土分布図《縮尺任意》

梨考古学論集』VII、pp.155-164、山梨県考古学協会  
 津野仁 2006「栃木県出土の古代製塩土器について」『研究紀要』第14号、pp. 1-10、(財) とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター  
 津野仁 2008「栃木県と周辺の古代製塩土器」『山梨県考古学協会2007年度研究集会 塩の考古学—ゆく塩、くる塩、古代の塩とその流通を考える—』、pp.25-43、山梨県考古学協会  
 平野修 2010「考古学からみた古代内陸地域における塩の流通」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第14集、pp.101-113、帝京大学山梨文化財研究所  
 平野修 2013「川を上り峠を越える製塩土器」『古代山国の交通と社会』、pp.141-160、鈴木靖民・吉村武彦・加藤友康編、八木書店  
 平野修・閔間俊明 2014「山梨県韮崎市域の新発見古代製塩土器」『山梨考古学論集』VII、pp.133-154、山梨県考古学協会  
 韮崎市遺跡調査会他 1992『宮ノ前遺跡』  
 韮崎市教育委員会 1997『宮ノ前第5遺跡』

南アルプス市・南アルプス市教育委員会・(財) 山梨文化財研究所 2009『野牛島・西ノ久保遺跡III・V・VI区』  
 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第20集  
 山梨県教育委員会・山梨県土木部 2007『滝沢遺跡・庖橋遺跡・谷抜遺跡 一般国道137号河口2期バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第247集  
 山梨県教育委員会・山梨県国土整備部 2012『滝沢遺跡(第2次) 一般国道137号吉田河口湖バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第282集  
 山梨市・山梨市教育委員会・(財) 山梨文化財研究所 2012『三ヶ所遺跡(第三次調査地点) -市道小原東東後屋敷線改良に伴う発掘調査報告書-』山梨市文化財調査報告書第15集  
 若草町教育委員会他 2002『向第1遺跡』若草町埋蔵文化財調査報告書第3集  
 渡辺誠 1987「粗塩・堅塩と焼塩のこと」『考古学ジャーナル』284、pp.3-3、ニュー・サイエンス社





第1表 滝沢遺跡第1次・第2次出土製土器観察表

揭露番号	遺跡名	出土地点	共伴土器の時期	胎 土	色 調	整 形	特 徴	部位	分類	重さ(g)
1	滝沢遺跡	05特沢 1区5 住一括	9C前	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 横位ナデ 外面 斜位・斜位ナデ	やや硬質、外面ちりめん状ヒビ顯著	胴部	—	7
2	滝沢遺跡	05特沢 2区1 住一括	9C後	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内面 明黄褐色 外面 鮎い褐色	内面 斜位ナデ 外面 斜位ナデ	やや軟質、内面一部剥離	胴部	—	2
3	滝沢遺跡	05特沢 2区3 住一括	9C前	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 斜位・横位ナデ 外面 斜位ナデ	やや硬質	胴部	—	3
4	滝沢遺跡	09特沢 2区3住 一括	9C前	白色・黒色粒子、雲母、小礫(比較的 精選されている)	内外面共にぶい 黄褐色	内面 斜位・横位ナデ 外面 斜位・横位ナデ	硬質、口縁端部面取り	口縁部	C類-2か	3
5	滝沢遺跡	05特沢 2区7 住一括	9C前	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 斜位・横位ナデ 外面 斜位ナデ	やや軟質	胴部	—	4
6	滝沢遺跡	(09V) 区38 上	—	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内面 橙色 外面 鮎い褐色	内面 斜位・横位ナデ 外面 斜位・横位ナデ	やや硬質、内外面比較的強く被熱	胴部	—	3
7	滝沢遺跡	(特沢) 1集石 遺構	9C前～ 10C中	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	外面 極灰色 内面 ぶい橙	内面 横位ハケメ 外面 斜位ナデ	やや硬質、強く被熱し内外面の荒れ顯著	胴部	—	4
8	滝沢遺跡	09特沢 V 1集	9C前～ 10C中	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に灰黃 褐色	内面 横位・縱位ナデ 外面 斜位・横位ナデ	やや硬質	胴部	—	4
9	滝沢遺跡	外沢 1 集	9C前～ 10C中	白色・黒色粒子、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 横位ナデ 外面 斜位ナデ	やや軟質、摩滅や顯著	口縁部	B類	1
10	滝沢遺跡	09特沢 V AP- 14	—	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 斜位ナデ 外面 斜位ナデ	やや軟質、摩滅や顯著、内外面薄く赤褐色化	胴部	—	2
11	滝沢遺跡	09特沢 V AP- 15	—	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 斜位・縱位ナデ 外面 斜位ナデ	やや硬質	胴部	—	5
12	滝沢遺跡	09特沢 V AP- 15	—	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 横位ハケメ、縱位ナデ 外面 斜位・横位ナデ	やや硬質、外面難しき顯著、外面部分的に薄く赤褐色化	胴部	—	4
13	滝沢遺跡	09特沢 V AP- 15	—	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 斜位ナデ 外面 斜位ナデ	やや軟質、摩滅や顯著	胴部	—	2
14	滝沢遺跡	09特沢 V AP- 16	—	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 横位ハケメ 外面 斜位ナデ	やや硬質、口縁端部部分的に面取り	口縁部	C類-2か	3
15	滝沢遺跡	09特沢 V AP- 16	—	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 斜位・横位ナデ 外面 斜位ナデ	やや軟質	胴部	—	3
16	滝沢遺跡	09特沢 V AP- 17	—	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内面 鮎い褐色 外面 明黄褐色	内面 斜位ナデ 外面 斜位ナデ	やや軟質、内外面比較的強く被熱	胴部	—	4
17	滝沢遺跡	09特沢 V AP- 18	—	白色・黒色粒子、雲母、小礫	外面 赤褐色 内面 極灰色	内面 横位ハケメ状ナデ 外面 斜位ナデ	やや軟質、強く被熱、内面の荒れ顯著	胴部	—	4
18	滝沢遺跡	09特沢 V AP- 17	—	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 横位ハケメ 外面 斜位ナデ	やや硬質	胴部	—	4
19	滝沢遺跡	09特沢 V AP- 18	—	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 横位ハケメ 外面 斜位ナデ	やや硬質、口縁端部部分的に面取り	口縁部	C類-2か	2
20	滝沢遺跡	09特沢 V AP- 18	—	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 縦位・斜位ハケメ状ナデ 外面 斜位・横位ナデ	やや硬質、摩滅や顯著、外面一部灰褐色化、口縁端部部分的に面取り	口縁部	B類	5
21	滝沢遺跡	09特沢 V AQ- 16	—	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共橙色	内面 横位ナデ 外面 斜位ナデ	やや軟質、摩滅や顯著	胴部	—	4
22	滝沢遺跡	09特沢 V AR- 14	—	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 斜位ナデ 外面 斜位ナデ	硬質、外面一部剥落、小礫スケ顯著	胴部	—	16
23	滝沢遺跡	09特沢 V AR- 15	—	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面とも赤褐色	内面 全面剥離 外面 斜位ナデ	やや軟質、強く被熱	胴部	—	5
24	滝沢遺跡	09特沢 V AS- 14	—	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 横位ハケメ 外面 斜位ナデ	やや硬質、胴部くびれ顯著	胴部	—	2
25	滝沢遺跡	09特沢 V AS- 14	不明	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫 (比較的精選されている)	内外面共にぶい 黄褐色	内面 斜位・横位ナデ 外面 斜位・縱位ナデ	やや硬質	胴部	—	2
26	滝沢遺跡	09特沢 V AS- 14	—	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 斜位ナデ 外面 斜位・縱位ナデ	やや軟質、摩滅や顯著、内外面薄く赤褐色化	口縁部	B類	3
27	滝沢遺跡	10特沢 V AS- 14	—	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 斜位・横位ナデ 外面 斜位・縱位・横位ナデ	やや軟質、外面スヌ状ヨレや顯著	胴部	—	3
28	滝沢遺跡	09特沢 V AS- 14	—	白色・赤色・黒色粒子、砂礫	内外面共浅黃褐色	内面 斜位ナデ 外面 斜位ナデ	やや軟質、外面の荒れ非常に顯著、内面一部赤褐色化	胴部	—	3
29	滝沢遺跡	(09特 沢V) AS-15	—	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 斜位ナデ 外面 斜位ナデ	やや軟質、外面薄く赤褐色化	胴部	—	1
30	滝沢遺跡	09特沢 V AW- 12	—	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共にぶい 黄褐色	内面 横位ハケメ 外面 斜位ナデ	やや硬質、摩滅や顯著	口縁部	C類-1	7
31	滝沢遺跡	09特沢 V AW- 12	—	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共橙色	内面 斜位・横位ナデ 外面 斜位ナデ	軟質、外面摩滅顯著、内面強く被熱	胴部	—	7

総重量 122